

「トマスの福音書」は、1945年に、エジプトのナイル川河畔の洞窟に1850年以上も埋もれていた壺の中から奇跡的に発見されました。これは、イエスの言葉だけを記載してあるもので、「言葉福音書」と呼ばれています。全部で114項目ありますが、そのほとんどが例え話です。一読して何を言いたいのか、良くわからないものが多いのですが、「それらは、瞑想や悟りのお話で、イエスが話した例え話である」と仮定して、では、一体それが何の例え話であるのかを解説しています。今回は、その第7回目です。

なお、各センテンスの訳文は、上段、中段、下段の順に

- (1) Thomas O. Lambdin による英訳
- (2) Stephen Patterson and Marvin Meyer による英訳
- (3) 「トマスによる福音書」(荒井献著・講談社学術文庫)による和訳の順に記載しています。

■ (No. 32)

(32) Jesus said, "A city being built on a high mountain and fortified cannot fall, nor can it be hidden."

(32) Jesus said, "A city built on a high hill and fortified cannot fall, nor can it be hidden."

(32) イエスが言った、「高い山の上に建てられ、固められた町は、落ちることもできないし、隠されることもできない」

前節で解説しましたが、イエスは郷里に帰った時に、いつも弟子の前で見せているようなイエスらしい働きをしませんでした。そこで弟子達は、少々不満顔で、「なぜ、イエス様は、郷里ではイエス様らしくないのですか」と聞きました。その答えが、次のイエスの言葉でした。再掲します。

「イエスが言った、『預言者は自分の郷里では歓迎されることはないものだ。医者には自分を知っている人々を癒さないものである』」

このように、イエスは、郷里では、悟っている素振りはちっともしないばかりか、まるで、悟っていない風に、つまり、自分自身の悟った身を、隠すようにしていましたので、弟子達は少し心配になりました。イエスの教えを受けるためには、「悟ったイエス」が身を隠してしまっただけでは困るわけです。そこで弟子達は聞きました。「イエス様。イエス様が身を隠されると、とても私たちは困るのですけれども」

それを聞いて、イエスが笑いながら答えました。

「肉体的な私は身を隠す事はあっても、悟っている私は身を隠しようもない。それは見る目があれば、誰の目にも明らかだ。郷里の人は、特に幼馴染や親戚縁者は、見る目が無いというより、先入観が払拭できないから、分からないだろうが、見る目のある人の前では、隠れなくても隠れきれないよ」

「そうですか。イエス様」

「そうだと。それはまるで、高い山の上に建てられ、固められた町のようなものだ。遠くからも見えるし、落ちることもないし、隠れることもできない」

「なるほど。見る側の目にゴミがなくて、しっかり透き通っていれば、そのようにはっきり見えるのですね。それなら安心です」

「そうだよ。だから、どこにそれがあるかを心配するより、自分の目を磨いた方が賢明だ。すると自ずと見える。見逃すこともない」

「はい」

「笑雲先生」

「なんだい、小松茸」

「イエスも、やんわりと、見る目を養いなさい、つまり、修行しなさいって言ってますね」

「やんわりでもないと思うけど」

「うっ、そうですか。では、次に行きましょう」

「あはははは」

■ (No.33)

(33) Jesus said, "Preach from your housetops that which you will hear in your ear. For no one lights a lamp and puts it under a bushel, nor does he put it in a hidden place, but rather he sets it on a lampstand so that everyone who enters and leaves will see its light."

(33) Jesus said, "What you will hear in your ear, in the other ear proclaim from your rooftops. After all, no one lights a lamp and puts it under a basket, nor does one put it in a hidden place. Rather, one puts it on a lampstand so that all who come and go will see its light."

(33) イエスが言った、「あなたが自分の耳に聞くであろうことを、あなたがたの屋根の上でほかの耳に宣傳えなさい。誰でも明かりをともし、それを柀の下に置かないし、それを隠された場所におかない。むしろそれを燭台の上に置く。入って来たり出で行ったりする人々がすべてそれらの光を見るように」

さて、「悟ったイエス」は、山の上にある町のように堅固で明るく光っていますから、それは問題ではありません。

問題は、その教えをどのように他の人に伝えるかということです。

イエスは、自分の教えについて、隠したり、秘伝のようにして教えるのではなく、どんどん明らかに公表していくことを望んでいました。

それは、そうだと思います。

教える内容に自信がなかったり、教える内容そのものに実質が伴っていなかったりすると、得てして、それを隠そうとして、一部分だけ教えるとか、本当は内容がないのにあたかも何か内容があるように、そして、まるでまだ大切なことを奥に隠している素振りで教えるとか、これは秘伝だから簡単には教えられない等のもったいぶった態度になりがちです。

ところが、イエスは自分の教えに自信がありましたし、それを多くの人に広めて、多くの人を幸せにしたいと心から思っていましたから、隠しながら教えるとか出し渋るとかの方法は、もっての外、まったくの論外だったわけです。

ですから、弟子達に対しても、積極的に、オープンに、包み隠さず教えを広めるように言っていたのだらうと思います。

これは、イエスがそのような話をしていた時の、例えだと思います。

「マタイの福音書」(10-27)にもよく似たものがあります。

「私が暗闇で、あなたがたに話すことを、明るみで言いなさい。耳に聞くことを、屋根の上で述べ伝えなさい」さらに、「ルカの福音書」(8-11, 16)にも似た表現があります。

「誰も明かりをともし、それを何かの器でおおいかぶせたり、寝台の下に置いたりはしない。燭台の上に置いて、入ってくる人たちに光が見えるようにするのである」

また同じく(8-33)では、

「誰でも明かりをともし、それを穴倉の中や柀の下に置く事はしない。むしろ入ってくる人たちに、その明かりが見えるように燭台の上に置く」

とあります。

ですから、イエスは次のように弟子達に話していたのでしょう。

「いいですか、みなさん。私から習うことも大切ですが、習った事は、他の人にもどんどん伝えて下さい」
「イエス様、このような大切な教えは、それはこっそりと耳打ちするような教え方で伝えるのですか」
「いやそうではなくて、はっきりと自信を持って、大きな声で伝えてください。まるで屋根の上から大声で宣伝するようつもりで」
「なるほど」
「私の教えは本当の教えです。真実の教えです。とても光り輝いているものです。世の中を明るくするものです。多くの人を幸せにするものです。それを隠してはいけません。いいですか、誰でも明かりをともして、それを柀の下に置かないでしょう。それを見えないところや、隠れた場所に置きません。明かりはどこに置きますか？」
「燭台の上です」
「そうですね。私の教えは、明かりです。ですから、それを燭台の上に置いてください。すると、入って来たり出て行ったりする人々がすべて、その光を見ることが出来ます」
「何も秘密にしないで、どんどん伝えればいいのですね」
「そうです。何も秘密はありません。何も特殊なものもありません。何も隠されたワザもありません。全部オープンです。どんどん伝えてください」
とイエスは言いました。

「笑雲先生」
「なんだい、小松茸」
「誰にも彼にもどんどん伝えと、それは問題だと思えますが」
「そうだね。問題だね」
「誤解されたりしませんか？」
「その心配はあるが、明かりが見える人は、見えるだけの素養があるということなのだろうな」
「では、耳は？」
「教えを聞き取れる人は、聞き取るだけの素養があるということだろう」
「よく、イエスが、『聞く耳のあるものは聞きなさい』って言ってますが、そういうことですか？」
「そうかもしれないが、ちょっと変だね」
「どこが変なのですか？」
「『聞く耳の無い人』は聞いても分からないし興味もないのだから、『聞くな』と言う必要はない」
「そうですね」
「『聞く耳のある人』は聞いていれば理解できるのだから、『聞く耳のある人は聞きなさい』と言う必要はない」
「そうですね」
「だから、イエスはそのような変な言い方はしなかったのではないかと思う」
「どのような変な言い方ですか」
「『聞く耳を持っている人は聞きなさい』という変な言い方。イエスらしくない」
「では、後からの人が付け足したのでしょうか。笑雲先生」
「う〜ん、そうかもしれない。あるいは、普通に言っていたのが、そのように変化したのかもしれない」
「どう、普通に言っていたのですか？」
「例えば、『いいですか、これは大切なポイントですから、もう一度言いますが、良〜聞いてくださいよ。両耳の穴をかつぼじて、しっかり聞いてくださいよ』と言っていたのかもしれない」
「なるほど。そのように弟子に言っていたのを、後で、弟子が編集すると、自分達は聞く耳があったのだというような編集になるわけですね。その可能性はありますね。確かに」

「そうだね。ちょっと横道にそれたが、ここでは、明かりは燭台の上に置いて欲しいとイエスは言っているということだ」

「自信があるということですね」

「そうだね。自信もあるが、そうすることが自分の責務、自分の任務、天命と思ってるからだろうね。自分が知り得た貴重な幸せになるノウハウを多くの人に伝えるのは、自分の義務だと思っていたのだから」

「なるほど。隠そうなんて、そんなケチなことは、ちっとも思っていなかったってことですね」

「そうだね。だが、長い歴史を経ると、いつのまにか真実は隠されてしまった。実態からいえば消えてしまった。途切れてしまった。変な風利用されてしまった。善意か故意かそれは分からないけれど、イエスの意図したものとは違うものにされてしまった」

「そうですね。残念ですね。でも、今回、こうして新たな福音書が発掘され、解読され、解釈されていくと、それが復活する可能性もありますね」

「そうだね。それは大いに期待できるね。現代は、情報量とその伝達のスピードは、昔と比較すると天文学的な倍数になっているから、いろいろなことが、良い方向に変わるのも早い感じだね」

「2000年かかって分からなかったことが、3日で分かる？」

「あはははは、そこまでは」

■ (No. 34)

(34) Jesus said, "If a blind man leads a blind man, they will both fall into a pit."

(34) Jesus said, "If a blind person leads a blind person, both of them will fall into a hole."

(34) イエスが言った、「もし盲人が盲人を導くなら、二人とも穴に落ち込むであろう」

前節で、イエスは「私の教えはとても光り輝いているから、それを柀の下に置いたりしないでどんどん伝えてください」と言いました。

すると弟子のトマスが、

「イエス様、その光り輝いている明かりが見える修行の進んだ弟子なら、それを人に伝えることができると思います」

「そうです。トマス、それでいいんです。どんどん伝えてください」

「ですが、イエス様。もしその明かりが見えない弟子の場合は、見えた振りをして、本当の教えとは違うことを、その次の人に伝えることになりませんか」

と言いながら、トマスはペテロの顔をチラッと見たかもしれません。見なかったかもしれません。

「そうだね。そうすると、盲人が盲人を導いて、二人とも穴に落ち込むということになるね」

「笑雲先生」

「なんだい、小松茸」

「盲人が盲人を導いて、二人とも穴に落ち込むと大変ですよ」

「そうだね。大変だ」

「じゃあ、どうすればいいんですか。笑雲先生。特に、手を引かれていく方の身としては」

「自分の手を引っ張ってくれてる人が、本当に目が見えているかどうか、薄目だけでも開けてチェックしてみることだね」

「薄目だけでも？」

「そうだ、小松茸。薄目だけでも開いていると、例え盲人に手を引かれても穴には落ちないぞ」

「それはそうですが、じゃあ、笑雲先生、どうやって、薄目だけでも、あるいは片目だけでも開けるんですか？そもそも、その目が開かないから問題なんですけど」

「そうか。では、問題は目の開け方か？」

「そうです」

「それを、イエスは、ずっと話しているわけだ」

「どう話しているんですか」

「ちゃんと瞑想の修行をして、心の目を開けなさいってことだ」

「心の目を開けるって、具体的にはどういうことですか」

「心の目は、誰でももともとは開いていたのだ。もともとは開いていたのだが、マインドが立ち上がり、学習や経験から拙いプログラムを作り貯めてくると、次第に真我を覆い隠すようになってくる。まるで、真我を閉じ込める家が建ってくるようなものだ」

「では、その真我を救い出せば、目が開くのですね」

「そうだ。でも、その家のように構築されたプログラム群は、それを作ったマインドが堅固に守っている」

「なぜ、守っているんですか」

「例えば、熱いものに手を触れて、火傷をして痛い目に遭ったとする。すると、マインドはもう二度とそのような痛い目に遭いたくはないから、熱いものから素早く逃げられるようにプログラムを作る。そして、そのプログラムを堅固に守る。

これは当然だ。自分と自分の主人を守るのがマインドの役目だ。もし、それを忘れて、捨ててしまうようであれば、それはマインドとして本来の仕事をしているとは言えない。マインドは、自分の作ったプログラムを堅固に守る。それが、本来の仕事だ」

「なるほど。学習してしっかり覚えることですね」

「そうだ」

「でも、それらのプログラム群が真我を取り囲んでいると、目が見えないことになってくるのですよね」

「その通り。だから、要らないプログラムは取り去らなければならない」

「ちょっと待ってください。熱いものは危険だというプログラムは、必要なプログラムだと思いますけれども。要らないプログラムって、どんなものですか」

「なるほど。では、要らないプログラムを説明しよう」

「はい」

「まだ、何も学習していない子どもは、何もプログラムを持ってはいない」

「はい」

「だが、マインドが働き始めると、自分の経験や、聞いたことや、学習から様々なプログラムを拙速で、どんどん作っていく」

「はい」

「例えば、『オバケは怖い』だとか『暗闇が怖い』だとか」

「それらは、要らないのですか」

「そうだ。幼い時は夜子供が一人で夜歩きしていたら危険なので、『オバケが怖い』や『暗闇は怖い』はそれなりに意味がある。だから、幼児のときはそれなりに必要であったかもしれない。でも、大人になれば要らないものだ」

「なるほど」

「そのような幼児じみた分かりやすいものだけでなく、『愛されなくては生きていけない』だとか、『一番でなくては意味がない』だとか、『認められなければ生きている甲斐がない』とか、『尊敬されるためにはお金持ちにならなくてははいけない』とか、そのような概念的なプログラムもいろいろ作っていく」

「そうですね」

「だから、まあ、大方のプログラムは、要らないプログラムだ」

「そんな、笑雲先生、大雑把な」

「いいのだ、大雑把で」

「でも、全部捨てたら困るでしょうに」

「そうでもない。まあ、一度全部、思い切って捨ててから、後で、必要なものだけを収集し直しても十分間

に合う」

「間に合うとは、どういうことですか」

「その場になって、その瞬間、その瞬間に考えても、間に合うということだ。それほどマインドの働きは超高速だ」

「じゃあ、プログラムは、まったく必要ないということですか」

「極端に言えば、そういうことだ。プログラムがなくなれば、ずっと目が覚めていられる。無自覚ではなくなる。それで何の問題もない。プログラムを全部捨ててしまっても問題はまったく無い」

「記憶もなくなるのですか。笑雲先生」

「いいや、記憶は何一つ失われることがない。どんな些細な記憶も消えることはない」

「では、記憶は残っていて、プログラムだけが消える」

「そうだ」

「でも、笑雲先生、同じ辛い記憶が残っているなら、そして、それを保持しているなら、また再び、同じプログラムができませんか？」

「そうはならない。なぜなら、同じ記憶でも、その解釈は変わってくる。それはそうだ。幼い、拙いプログラムは、まだ自分が、幼くて、人生経験も、ものごとの知識もあまりないときに、その時の自分の解釈にもとづいて応急で作ったものだ。そのような作り方は、大人になるともうなくなる。例えば、『暗闇にお化けがいる』とは大人は思わなくなる。『愛されなければ死ぬ』とは思わなくなる。そしてもし、どうしても作る必要があれば、大人の妥当なプログラムができることもある。『暗闇では足元に何か横たわっていても見えないから、危険だ』などと、『お化け』という非科学的な発想ではない。しかし、それが、自動反応が必要なほどのことでなければそもそもプログラム化されない」

「なるほど。とにかく、プログラムを、一旦、外さないと心の目は開かないということですね。でも、どうやってそれらのプログラムを外すんですか、マインドがしっかりプログラムの守備をしているのですから、それをマインドから取り上げるのは難しいですよ、笑雲先生」

「たぶん、そのように聞いた弟子が、その時も居たんだろうね。だから、次のセンテンスで、イエスがそのやり方を話している。それはまるで強奪するくらいのもりでやらないと難しいよ、と説明している」

「なるほど。そうですね。では、次に行きましょう」

■ (No. 35)

(35) Jesus said, "It is not possible for anyone to enter the house of a strong man and take it by force unless he binds his hands; then he will (be able to) ransack his house."

(35) Jesus said, "One can't enter a strong person's house and take it by force without tying his hands. Then one can loot his house."

(35) イエスが言った、「誰も強い人の家に押し入って、彼の両手を縛りあげなければ、それ（家）を強奪することはできない。そうすれば、彼は彼の家を押し倒すであろう」

これは、例えです。例えの内容は、「家を強奪するには、守っている強い人をまず動けないように縛り上げなければならぬ」と言っています。当時のこの辺りの家は、テント式の家です。折りたたんで運ぶこともできるものです。家財道具もろとも家全体が強奪の対象になるわけです。さて、ここでは、その強奪の手順を言っています。

この例えの要素を、ひとつずつ説明すると、「強い人」というのは「家」を守っている「マインド」にあたります。確かに強いですね。また、「家」というのは「プログラム群」のことです。

つまり、プログラム群を守っているマインドがあるので、プログラム群を強奪するためには、まず、マインドを動けないようにするのが先決だと言っているわけです。

マインドを先に動けないようにしておく必要があるということです。

これは、とてもよくできた瞑想の手順の説明です。